(公社)日本分析化学会関東支部創立 60 周年を祝って～思い出すまに

関東支部参与 中村 洋
(2000 年度 支部長)

私が日本分析化学会 (JSAC) に入会したのは 1978 年、34 歳の時であった。私はその頃、田村善藏教授が主宰する薬品分析化学教室で助手をしており、日本薬学会が活動の場であったが、同じ研究室の谷村憲徳助教授の勧めにより入会した。翌年、幸運にも JSAC から奨励賞を戴けることになり、1979 年の秋に日大郡山で行われた年会での授賞式に出席した。それまで私は JSAC 関係の学会には一度も出たことがなかったので、受賞講演が私にとってはデビューとなった。その後は前田昌子助教授 (昭和大薬) の後任として「分析化学」の編集委員にして戴いたのを手始めに、色々な局面で使って戴いた。関東支部が主催する機器分析講習会では、本間春雄室長 (理研) がオーガナイザーをされていた「高速液体クロマトグラフィーの基礎と実践」で鈴木義仁先生 (山梨大工)、及川紀久雄先生 (新潟薬科大) などの講師陣の末席としてお手伝いをした。その頃の思い出としては、LC/MS の実習が初めて採り上げられた年には、寺 正成さん (島津製作所) が MS を理研に持ち込み、テントに 1 週間ほど泊まり込んで MS を調整してくれたことである。又、オーガナイザーを私が担当するようになってからは、LC/MS の実習をお願いした Y さん (某社) から運搬費・人件費など多額の実費を要求され驚いたこと、車で運んできた日立の実機が理科大薬学部 (飯田橋) のエレベーターに入らず、クレーンで 2 階に釣り上げて窓から搬入した事件など、懐かしく思い出される。この実習は現在も続いており、メーカーの方々には未だに大変お世話になっている。

その間私は、本部事業である「分析化学」誌や「Analytical Sciences」誌の編集理事を歴任したこともあり、「分析化学用語集」編集委員会などを通じて非会員の相澤益男氏や軽部征夫氏とも知り合う一方、JSAC 本流の理工系では藤原鎮男、鎌田 仁、黒田六郎、鈴木信男、赤岩英夫、杉谷嘉則、澤田嗣夫ら諸先生の薫陶を受ける機会を得た。しかし、支部役員となったのはずっと遅く、50 歳近くになってからである。関東支部創立 50 周年記念誌を紐解くと、1996 年度常任幹事、1997～1999 年度副支部長、2000 年度支部長、2001 年度から参与と記載されている。支部の執行部に入ってから思い出は、20 世紀最後の関東支部長として新世紀賞を創ったことである。第 1 回目の受賞者の一人は、今や中国を代表する大物に成長した林 金明君 (推薦者：保母敏行教授) であった。副賞の 10 万円は、1 円玉を 10 万枚 (10⁵ g 即ち 100 kg) ズダ袋に入れて贈呈するよう提案したが、『先生、それは気の毒ですよ』と常識家の田中一二三職員に諭されてふいになった。

地元の関東支部には多くの親しい知己がいるが、その他にも新年会でしか会わない人、活字でしか知らない人、顔は知っているが名前が分からぬ人が大勢おられる。関東支部に属したお蔭で、実に沢山の方々と接することができたのは、JSAC 会員の半数を擁する筆頭支部にいた特典であると感じている。関東支部は、聖徳太子が制定した十七条憲法の第一条、「和を以って貴しとなす」を代々モットーとして、和気藹藹発展してきた。関東支部の若いの方々には、ヒューマンネットワークを益々密にして、これからも JSAC の牽引役となってくれるよう、お願いして筆を擱く。

(2015 年 9 月 12 日 記)